

東南アジア・マライ群島圏資料・研究センター

(Centre de Documentation et de Recherches sur l'Asie du Sud-Est et le Monde Insulindien)

たか　　はし　　たもつ
高　　橋　　保

はじめに

- I 創立と発展過程
 - II 組　　織
 - III 研究活動
 - IV 図　書　館
 - V 出　版　物
- おわりに

はじめに

パリ市左岸で有名な公園といえば、やはりまずリュクサンプール公園ということになるだろうが、今は上院として使用されているそのリュクサンプール宮殿の正面から、セヌ河の方向に向けて出ている通りがトゥルノン(Tournon)通りである。近年この辺りもファッション流行の先端を担う種々のブティックが軒を並べるにいたっているが、まだまだそのたたずまいは静かである。

その一角、トゥルノン通り6番地は、通りからみると石門の背後に広い中庭が見えるだけで、建物はその中庭を囲んでコの字形に建っている。実はこの建物の中には多くの大学関係研究機関が同居しているのであるが、以下に紹介しようとする「東南アジア・マライ群島圏資料・研究センター」もその一角にある。現在、筆者は協力研究員として同センターに所属している。このセンターの正式名称は上記のように非常に長いので、通常はその略称たる CeDRASEMI 名で呼ばれることが多い。

I 創立と発展過程

この東南アジア・マライ群島圏資料・研究センターは、現在でも物理的にはきわめて小規模のセンターであるが、このセンターが創立されたのは1962年10月であった

から、その歴史もまだ13年あまりという若さである。

1950年代から各機関の民族学・言語学を中心とする東南アジア研究者が共同研究を行なっていたのに対して、大学院大学ともいべき高等研究実習学校(Ecole Pratique des Hautes Etudes, EPHE と略す)の第6部(経済・社会科学部門)が1957年に公式に場所を提供したのに始まり、1960年に同校に正式に「東南アジアおよびインドネシア圏の民族学・社会学」なる一講座が開かれ、その担当となったG・コンドミナス(Georges Condominas)教授に対して、2年後の1962年10月に資料センターが委任されたのが当センターの起源となったわけである。当時はその資料センターは、パリの西端バンセンヌの森の傍にあるアフリカ・オセアニア美術館(Musée des Arts Africains et Océaniens, 旧称 Musée de la France d'Outre-Mer)の一角に間借りしていたのであり、以後1968年10月から1971年末までパリ市5区にある博物学関係博物館(Musée d'Histoire Naturelle)に間借りし、やっと現在地に落ち着いて本格的活動に入ったのが1972年初頭以降のことであった。

しかし、この間、研究機関としての体制は次第に整備されつつあった。すなわち1964年6月から全国研究関係業務の統轄の任にある国立科学研究センター(Centre National de la Recherche Scientifique, CNRS と略す)の研究計画 No.61(東南アジア・インドネシア圏民族言語地図 Atlas Ethnolinguistique de l'Asie du Sud-Est et du Monde Indonésien)のための協力研究機関となったことによって、調査研究遂行のための財政的な大きな柱ができた。この研究計画は1967年および1971年と2回にわたって更新されている。そしてこの間、こうした財政的支柱をバックに1968年6月の資料センター員総会において、センターの名称を東南アジア・インドネシア圏資料・研究センター(Centre de Documentation et de

Recherches sur l'Asie du Sud-Est et le Monde Indonésien)とすることが決定されている。1971年末に CNRS との研究計画の契約期間が切れたのを機に、センターは CNRS に常設の CNRS 直属の研究機関として位置づけられるよう申請して許可され、CNRS の附属研究室 (Laboratoire Associé) No. 183 となった。同時にその際センターの名称も上記と若干変わり、標記の名称 (Centre de Documentation et de Recherches sur l'Asie du Sud-Est et le Monde Insulindien) となって現在にいたっている。新旧名称の違いは「インドネシア圏」(le Monde Indonésien) が「マライ群島圏」(le Monde Insulindien) になっただけであるが、この改称の理由について、筆者が関係者から聞いたところは、以下の通りであった。つまり、上記の両者はほぼ同じ地域を指す言葉ながら、「インドネシア圏」がともすればインドネシアという政治的領域を指すと受けとられるきらいがあるので、それを避け、純粋に地理学的な用語としての「マライ群島圏」を採用したというわけである。

また上記の EPHE での位置についても、発足当初は 1 講座で 1 人の教授 (Directeur d'Études と呼ぶ) しかいなかったが、その後次第に増員が認められ、1975 年では 4 講座に達していたが、1976 年初頭からついに 5 講座となっている。

以上のことから明らかなように、当センターは研究面では CNRS と密接な関係にある一方、教育機関としては EPHE 第 6 部の一部を構成しているのである。

いま EPHE での当センターの活動状況についてみると、当センターの教授の指導下に当センターの研究活動の一環として行なわれた調査活動をもとに提出された修士論文 (これを Memoire de l'EPHE という) やアメリカの Ph. D に当る第 3 課程博士 (Doctorat de 3^e Cycle) の博士論文は数多い。さらには当センター教授や研究員が長年の調査研究活動を基に提出した国家博士 (Doctorat d'Etat, これが博士号の最高峰とされており、その取得は容易でない) 請求論文もぼつぼつ出ている。従来は EPHE には国家博士の学位審査権はなかったが、ごく最近にいたってそのうち当センターの所屬する第 6 部 (経済・社会科学部門) についてはその審査権が認められるにいった。学校名もこれに伴って社会科学高等研究院 (Ecole des Hautes Etudes des Sciences Sociales, EHESS と略す) と改称された。ただ、実質的には EPHE 第 6 部としての機能にはほとんど変わりがないようである。

II 組 織

創立以来、当センターの所長 (Directeur) は一貫して G・コンドミナス教授である。小規模である当センターには、あまり系統だった組織らしいものは存在しないが、大きくみれば、行政部門と図書館部門の二つに分かれていますといえよう。

行政部門を担当する事務所は、上述したトゥルノン通り 6 番地のビルの、入口からみて左翼部 1 階の 1 室を占めている。ここには通常、センター所長と秘書 2 名がいて、センター内部の連絡、対外接衝をふくめて庶務的業務全般の遂行に当たっている。ちなみに、ここには、他の研究機関と同様、教授や研究員のための専用の部屋や机は一つもない。

この行政部門の下に、当センターに関係している研究者全員を網羅して組織されている 13 の研究グループがおかれている。各研究グループの名称とその活動については後述することとして、いま当センターに関係している研究者・事務職員 (図書館関係をふくむ) の資格別による内訳をみると、1975 年 6 月現在でつぎの通りである。

1. 正式に登録されている研究者・職員 64 名。その内訳は大学関係の教職にあるもの 12 名、研究員 (全てが CNRS の研究員) 21 名、事務職員 (臨時雇いをふくむ) 31 名となっている。

2. 他機関からの協力研究者 (フランス国内および外国機関の研究者をふくむ) 37 名。

3. 非登録研究者 (主として博士課程 Troisième Cycle の研究者) 22 名。

以上を合計すると、当センター関係者総数は 123 名に達する。

つぎに図書館部門についてみよう。この部門は、行政部門と同じ建物の右翼部 1 階にあり、ここには書庫、閲覧室と図書館事務室とがある。この部門には現在 7 人の職員がいて、センター所長の指示のもとに図書館関係全般の業務に従事している。

彼らの資格は、通常の研究員と異なり、CNRS の規定にしたがって、技術者扱いで、技師 (Ingénieur, 研究員でいうと上級研究員ともいふべき Chargé de Recherche に当る)、技術協力員 (Collaborateur Technique 研究員でいうと下級研究員としての Attaché de Recherche に当る)、特別契約による短期雇用員 (Vacataire) などと呼ばれている。しかし、彼ら図書館員たちはいずれも実質的には全て研究者であり、各々の研究テーマをもち、

研究機関紹介

当センターの研究グループに参加している。

なお、以上の外、当センターの機関誌発行関係業務のための事務所が、パリ市内の別のところ(ラスパイユ通り)におかれており、そこに1名の事務員がいる。

さて、以上のような当センターの運営費の財源についてみると、行政部門の人件費、器材費の全部および図書館部門の人件費の若干は学校(EHESS)から、また研究員の人件費、研究費はCNRSから出ており、ほかに図書購入費および機関誌発行業務費が人文科学会館(Maison des Sciences de l'Homme)から出ている。

III 研究活動

上記の行政、図書館の両部門に属している全研究者をふくめて、13の研究グループが組織されており、当センター所属研究員の研究活動は、これを中心に行なわれているといつてよい。そしてそれらの調査研究の中間報告と討論の場としては、実質的に当センターでの調査研究のリーダーシップをとっているEHESSの5人の教授(インドシナ民族学・社会学専攻のGeorges Condominas, 東南アジア民族学専攻のLucien Bernot, 中国・インドシナ民族言語学専攻のAndré-Georges Haudricourt, 東南アジア島嶼部の歴史を専門とするDenys Lombard, マダガスカル・インド洋地域の民族学専攻のPaul Ottino)のセミナーが利用されることが多く、論文の形では当センターの機関誌*Asie de Sud-Est et du Monde Indulindien*(=ASEMI)に発表されている。

以下、簡単にこれらの研究グループごとの活動状況を紹介してみよう。各研究者は一つないし二つのグループに所属している。

(1) 東南アジア・マライ群島圏民族言語地図(Atlas Ethno-linguistique de l'Asie du Sud-Est et du Monde Indulindien, 研究調整者 Lucien Bernot)

主要日常語(塩、犬など)80を選んで、言語別にカード化することを基本に、諸言語のリスト作成、分類、関係資料の文献目録作成、地図化のための基礎作業などを進めつつある。しかし、このグループの作業の最終目標たる東南アジア・マライ諸島地域の民族言語地図の作成は、同時に当センターのいわば当面の最終研究目標でもあり、その前提となる各地域、各学問分野別の調査研究作業が早急に進められなければならないので、とくにこのグループの仕事だけを急速に進めることはできない。むしろ目下のところは、各研究者とも個別地域の個別問題についての調査研究の方に力を入れているというのが

実態に近い。このグループの中間的成果は機関誌ASEMIの中に毎年一号(冊)の割合で特集号の形で発表されている。

(2) 民族技術(Ethnotechnologie, 研究調整者 Pierre Clement)

このグループは主として、東南アジアにおける居住の問題を中心に研究を進めており、その研究成果はやはり機関誌の中に毎年一つの特集号という形で発表されている。

(3) 東部インドシナにおける諸民族間関係(Relation Inter-Ethniques en Indochine Orientale, 研究調整者 Pierre Simon, René Gallissot)

このグループは、諸民族間の接触をめぐるさまざまな問題について、研究方法に関する理論的検討、植民地文学の批判的講読、東部インドシナ(旧フランス領インドシナ)における関係状況の研究、などを行なうことを当面の目標として1972年に発足した。最近当センター内では最も活発に活動している研究グループの一つである。

(4) 口承文学(Litterature Orale, 研究調整者 Georges Condominas)

このグループの研究活動はまず東南アジア地域の口承文学の収集法の問題についての検討から始まり、ついで現地での調査成果の討議に移り、大衆文学、人形劇や影絵芝居をふくむ民衆演劇の検討に入っている。

(5) マダガスカルにおける親族と社会組織(Parente et Organisation Sociale à Madagascar, 研究調整者 Paul Ottino)

マダガスカルやインド洋南西部地域を対象に社会人類学的あるいは文化人類学的研究を行なってきたが、最近では歴史学、考古学、言語学的研究、さらには口承文学の分野にわたる研究が進められるにいたっている。このグループはマダガスカル大学の関係研究グループと密接な協力関係にある。

(6) 形質人類学(Anthropologie Biologique 研究調整者 Albert Ducros)

生物学的人類学の専門家を中心に、主としてマダガスカル近傍のコモロ諸島での実地調査を中心として研究を進めているが、このグループのねらいは単に人類学的研究のみならず、さらに同地域の歴史学的、考古学的、民族学的研究を行なうことにある。

(7) 書誌(Bibliographie)

これまでこのグループでは、ベトナム関係とビルマ関係の文献目録の作成が進められてきた。

そのうち、ベトナムについては、ハノイ出版の理論誌 *Hoc Tap* (学習) の1954—1964年掲載分についての目録を完成し出版済みであり、次いで現在同じくハノイ出版の研究誌 *Nghien Cuu Lich Su* (歴史研究) の目録の完成、出版を急いでいるところである。このグループは次いで上記両誌の1965—1974年分についての目録作成作業に着手しており、本年末までの完成を目指している。

(研究調整者 Nguyen Dinh Thi)

ビルマについては、すでに出版済みのビルマ文献目録第1巻(1950~1960年分)について第2巻目の作成を急いでいる。(研究調整者 Denise Bernot)

(8) インドネシアの辞書・百科事典編集 (Lexicographie et Encyclopedie Indonesiennes, 研究調整者 Pierre Labrousse)

このグループは現地インドネシア学者との協力のもとに、500ページ位のインドネシア・フランス語辞典の作成を進めているが、同時に並行してインドネシア百科事典の作成作業も行なっている。

(9) マライ群島史 (Histoire Insulindienne, 研究調整者 Denys Lombard)

現地マレーシア、インドネシアの学者との協力のもとにマライ諸島地域の歴史研究を行なっている。

(10) インドネシア諸島の宗教民族学 (Ethnologie Religieuse dans l'Archipel Indonesien, 研究調整者 Christian Pelras)

このグループは以前はセレベス研究グループと称していたことから判るように、主としてセレベス南部とその周辺地域を中心対象地域として、その宗教民族学的研究を続けている。

(11) チモール (Timor, 研究調整者 Henri Campagnold)

チモールについて民族学、文化人類学を中心に、言語学、文学、歴史学などの各専門分野から研究しようとしているグループで、若手研究者が多い。

(12) ジャワの社会と思考様式 (Société et Mentalité à Java, 研究調整者 Marcel Bonneff)

ジャワの民族史、芸術の表現形式、農村経済、教育思想と教育伝統などの研究を通じて、ジャワの社会とその思考様式の解明を試みようという研究グループである。グループ形成後日は浅いがその研究意欲はまことに旺盛である。

(13) 現代インドネシア (Indonesie Contemporaine, 研究調整者 Pierre Labrousse)

このグループは差し当たっての目標として、インドネシアの国家哲学としてのパンチャシラ (Panca Sila) に関する総合研究を目指しており、政治史的、思想的、社会的、教育的など各方面からのアプローチをもとに研究を進めてきたが、その成果を本年末に書物にまとめて出版しようとしている。

以上が研究グループ引の研究活動の概要であるが、当センターの研究者の専門分野としてはやはり民族学(民族宗教学、民族植物学をふくむ)、文化人類学、社会人類学、言語学が多く、ついで地理学、歴史学、文学などとなっている。

また一方、研究対象地域としては、東はチモールから西はバングラデシュさらにはマダガスカルにまで、南はインドネシアから北は中国南部や台湾にまで及ぶ広範囲の地域にわたっている。そのうちとくに研究者の多い対象地域は、国別で見るとベトナム、カンボジア、ラオスといった旧フランス領インドシナ諸国、インドネシア、マダガスカルなどで、それらについてタイ、ビルマ、フィリピン、チモールなどとなっている。

さて、上記のような研究グループからは毎年交代で研究者を現地調査に派遣しており、これまでもそれによって多大の成果を挙げている。この現地調査実施の際は、出発までにフランスで対象地域の現地語をかなりの程度まで勉強しておくのを前提としているようである。

いま1973年から1975年までの3カ年について、当センターによる現地調査の人数、所要経費をみると、1973年度は合計16人、所要経費は18万2400フラン、1974年度は合計18人、所要経費は19万8000フラン、1975年度は合計14人、所要経費20万7000フランとなっている。

こうした現地調査に際しては、大学院博士課程の学生で現地語を勉強した者が先輩研究者と一緒に(あるいは時には単独で)現地調査に参加し、帰国してその調査成果を採り入れて第3課程博士論文を完成するというケースが多いようである。

なお、これらの現地調査費は全て上記 CNRS からの支出資金で賄われている。

IV 図 書 館

当センター図書館の所蔵図書冊数は1975年6月現在で1万0200冊(雑誌をふくむ、雑誌タイトル数は685)で、決して多いとはいえない。設立後日も浅いので、これは止むを得ないことかも知れない。

いま本図書館の若干の特色を挙げると、つぎの諸

点である。まず全般的には新しい出版物が所蔵書の多くを占めているが、旧フランス領インドシナ地域に関しては、元の植民地博物館 (Musée des Colonies のち Musée de la France d'Outre-Mer と改称、さらに現在では前出の Musée des Arts Africains et Océaniens となっている) 所蔵図書のうちアジア関係のもの700冊が1965年から当センターに移管された関係で、植民地時代に出版された書物、雑誌類がかなりあることである。また同地域に関しては、現地語文献とくにベトナム語文献が多く収集されているのも一つの特色といえよう。そのほか、資料センターとして地図 (現在1600枚) や写真 (現在整理済みのも1900枚、未整理のもの約3000枚) の収集に力を入れており、民族音楽や民族的祭祀に関する映画フィルムなどの蓄積にも努力している。そのほか、関係分野の物故研究者 (Jean Rispond, Paul Guilleminet など) の旧所蔵文献の所蔵も若干ある。

さらに、当センターでは、所属研究員についてはもちろんのこと、外部機関の研究者についても、センターの研究分野に関係する対象地域、専門分野について書かれた博士論文をできるだけ多く収集することに力を入れているのも一つの特色といえよう。

それにしても、現在の難点は、図書・文書類の所蔵に要するスペースがあまりに狭く、また資料整理のための人手 (実質的には人件費) が足りないことであり、この点の早急な改善が望まれる。当図書館は公開制であるが、現在では人件費不足のため、あるいはまた図書館部門の技術員 (実質的に研究者) にも研究のための時間をできるだけ多く持たせよとの当事者たちの要求を所長が受け入れたためもあって、週に2日 (水曜と木曜) しか開館されておらず、利用者にとってはきわめて不便である。

V 出版 物

当センターの出版物としては、単行本と雑誌の2種類がある。

まず単行本についてみよう。当センターの単行本出版は、一つの叢書の形で、原則として全部 CNRS 出版部から行なわれることになっているが若干例外もある。しかし、いずれにしてもその出版所要経費は全てCNRSから支出されているのである。

CeDRASEMI 叢書は五つのシリーズとなっている。第1は Atlas (地図) であるが、これは他のシリーズに比して最もおくれて出版される予定で、現在までのところ出版されたものはない。第2は Monographies (個別

研究論文) シリーズで、現在までに以下の6冊が出版されている。

Lucien Bernot, *Les Cak. Contribution à l'étude ethnographique d'une population de langue loi*, 1967.

Jacques Dournes, *Bois-Bambou. Aspect végétal de l'univers Jörai*, 1970.

Marie Martin, *Contribution à l'ethnobotanique du Cambodge*, 1971,

Jacques Lemoine, *Un village Hmong vert du Haut Laos. Milieu technique et organisation sociale*, 1973.

Jacques Migozzi, *Cambodge. Faits et problèmes de population*, 1973.

Barbara Wall, *Les Nya Hön. Etude ethnographique d'une population du Plateau des Bolovens (Sud-Laos)*, Editions Vithagna, Vientiane, 1975.

第3は Bibliographies (書誌) シリーズで、これまでに つぎの2冊が出版されている。

Denise Bernot, *Bibliographie birmane. Années 1950-1960*, 1968.

Nguyen Dinh Thi, Tran Ngoc Bick, *Bibliographie vietnamienne Tome I, Revue Hoc Tap (Etudes) Années 1954-1964*, Editions Sudestisie, Paris, 1975.

第4は Dictionnaires (辞書) シリーズで、現在までのところ、出版済みはつぎのものだけである。

Marc Reinhorn, *Dictionnaire laotien-français. Tome I, II*, 1970.

第5は Documents (資料) シリーズであるが、これまでのところ、やはり次の1冊が出版されただけである。

Louis Berthe, *Bei Gua. Les itinéraires des ancêtres (Bunaq de Timor)*, 1972.

以上が単行本としての出版状況であるが、つぎに雑誌について触れておく。

雑誌は3種類発行されているが、当センターの機関誌は上述の略称 ASEMI で、季刊である。1冊は約180ページで、これには特集号の形で研究グループごとの成果が逐次掲載されることが多い。

つぎに Archipel は1971年から当センターの東南アジア島嶼部地域研究者のイニシアチブで発行されている半年刊の雑誌で、1冊は約300ページ、発行のねらいはマライ諸島圏の文化・社会に関する国際的・学際的研究の発展という点におかれている。

これに対して、上掲の諸民族間関係についての研究グループのイニシアチブで1975年から季刊の形で発行されているのが *PLuriel* であり、1冊は約100ページとなっている。同誌は諸民族間関係、文化接触、少数民族問題、民族問題などに関する社会科学的研究の深化を目指すことを謳っている。

ともかく、こうして、当センターの調査研究と出版活動は幾多の困難を克服しつつ、近年次第に軌道にのり活発化しつつあることは間違いない。

お わ り に

ところで、コンドミナス所長の絶大な行政手腕の發揮によるところも大いにあずかって、これまで比較的短期間のうちに順調な発展を示してきた当センターではあるが、ここでも現在では、若手研究員の処遇問題、研究室・会議室や図書書類所蔵用スペースの不足、など多くの問題を抱えている。そこでこれらの問題を一挙に解決し、かつ当センターの今後の長期的発展の基礎作りを行なうという意味からも、近年関係者の中で当センターの南フランスへの移転問題が協議されている。

すでに数年前、CNRSの事務総局によって、当センターを南フランスのヴァルボンヌ (Valbonne, カンヌ北方約15キロメートル) に移す計画が出され、これをうけて

当センター関係者で作成した新研究センターの組織や建物に関しての青写真も1974年4月に CNRS に提出されており、目下その計画書をめぐる討議の最終段階にあるようである。この移転計画が実現されると、当センターは、組織面でも著しい拡大・整備が行なわれて処遇問題も一応解決され、また設備の点でも格段の改善を図ることができることになる。

さらに、南フランスは、気候条件がパリに比べて格段によいことは周知の通りであり、またすでにマルセイユ (Marseille)、エクス・アン・プロヴァンス (Aix-en-Provence)、ニース (Nice) などの各地に当センターとも関連の深い分野の研究機関・図書館の類が設立されており (これらの機関についても、筆者は今後機会を得て本誌に紹介したいと思っている)、南フランスへの移転は当センターの研究活動にも決して大きな打撃をもたらすものとはならない。

最近聞いたコンドミナス所長の話では、ヴァルボンヌへの移転は早くも1年半後、おそくとも2年後には実現したいとのことであった。この計画は現在のところ若干おくれる見通しが強いと思われるが、ともかくこうして、当センターにも今や新時代の到来が次第に近づきつつあるのである。

(在パリ海外調査員)

アジア経済研究所刊行

小林文男著

中国現代史の周辺

アジアを見る眼50/新書判/190頁/500円

中国現代史の總体的把握——それは共産党史を主軸としながら、伝統と共同体の問題、国民党の役割、台湾における人民革命の動態をも同時に正しく位置づけることである。本書はそうした立場から、現代中国への新しい視角を提起したユニークな論説集である。

長井信一訳

東南アジアと国際政治
—— 70年代の力の均衡 ——

アジアを見る眼51/新書判/230頁/500円

本書は、米中ソ日印5大国における東南アジア政策の展開を第2次大戦以降、74年春まで叙述している。ポスト・インドシナの東南アジア政治を展望するために必要なパースペクティブを与える恰好の書である。

アジア経済出版会発売